法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

<随想>テスト氏・風博士・ペルソナートゥス

立石, 伯 / タテイシ, ハク / TATEISHI, Haku

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
47
(開始ページ / Start Page)
96
(終了ページ / End Page)
100
(発行年 / Year)
1993-07-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019673

随想

テスト氏・風博士・ペルソナートゥス

立石　伯

世紀末になって、ますます《私》に対する関心が稀薄になっている。世紀末だからこそ逆に未知の、あるいは奇想天外な《私》が出現してもおかしくはあるまい、と思われる。いやこういう状態に文学・芸術が追いこまれているのはここ数年のことではない。随分永い年月こうした状況にあるような気がする。発明・発見、あるいは探究の深化をなによりも尊ぶはずの精神の仕事が等閑にされている。驚嘆に値する発明が幾星霜も絶えて久しいといっていいだろう。多くの側面で軽薄な騒々しさのみが跋扈している。こうした時世に、少し骨のあるものを欲することになるのは、それほど天邪鬼の仕業ではあるまい。もとより、文学ということであれば、またぞろ《私》論議ということになるか。なんとも芸のないことである。

元来、文学は、《私》ばかりに拘泥するわけではない。探究すべきことは山ほどある。古典的な概念でいえば、真善美、理想だとか希望だとか愛など、あるいはイデオロギイ的な世界観だとか、ふんだんにある。だが、ともあれ稀薄になってしまったと非難がましいことを述べてきたのだから、まず《私》から始めても白眼視されないだろう。《私》といっても、これ自体が既にして仮構のものである。実体のない空洞のものとなっている。時代が進み、というよりも時間と歴史の堆積につれて、つまり現代になればなるほどますますその実体は捉えがたくなっている。並大抵の労力では闇に隠された不分明なその姿を垣間見ることすらできない。捉えることに対する無力感すら蔓延している。それをそのまま放置して楽しんだりいくつしんだりするものも多い。はなから忘れていたり、そのふりをしたり、また投げやりなのもある。そのため、ブラックホールに吸い込まれたような未知の、未聞の《私》を追い求める粋狂なものがいても構わないということにもなろう。因にいっておけば、ドストエフスキイの『地下生活者の手記』ほどこのかんの微妙な消息を語った小説は稀である。

さて、ヴァレリーの描いたテスト氏の肖像は怪物だ、という伝説がたてられてから久しい。『地下生活者の手記』の私がそうであるように。世間が流布したというよりも、ヴァレリー自身が自分の制作物に意味と栄誉を与えるようにテスト氏を特権化したというほうが正確だろう。時代とさまざまな才能が微かな兆候を予知し、行き着く先の不明なままに要望し、まがりなりにも紙上に実現させた一つの時代の典型的な肖像だと言い換えてもよい。二十世紀の初めであるからようやくテスト氏は出現したわけではない。大雑把にいえば、ギリシアのソクラテス以前の哲学者達の思考の産物の或るものや当の本人達の言行に顕著に見られるものがその先駆的な萌芽だといえよう。したがって、そのような大きな精神史上の流れを暗黙のうちに取り込み、かつ十九世紀末の一定の動向を斟酌することによって、彼は新しい意匠を獲得した。ボードレール、ランボー、マラルメなどのあとにヴァレリーを位置づける意味を考えてみれば立所に明白になることだろう。

テスト氏は確かに怪物かも知れない。ヴァレリーがその作品の英訳のための序文で述べている見解はそれなりに興味深い。いわば正確への欲望、容易なことの拒否、文学に対する不信の念、自己の所有するものへの固執、信念と偶像に対する軽侮などはそれぞれ一定の根拠のあることだといえる。これはたんに精神のリゴリズムの産物ではない。精神そのものの属性であるといったほうがよい。ヴァレリーは次のごとく主張する。《何故にテスト氏は存在し得ないのか――この疑問こそ彼の魂である。この疑問が諸君をテスト氏にしてしまうのだ。何故かというと、彼こそ可能性の魔に他ならぬからである。》テスト氏は決定的な計算をし遂行するだろうし、さらには既知と未知との関係を凝視するでもあろう。そういう点で、彼は実在の不可能性を印づけられている。従って、ヴァレリーのいう《魔》は、もし魔そのものの属性を穿鑿しないならば《不可能性の魔》と呼ぶにふさわしい。

既に述べたように私は、ここでテスト氏についての論を立てようとしているのではない。《私》観の拡がりを坂口安吾や埴谷雄高の昭和十年前後数年間の評論やアフォリズムなどを一つの素材として遠望しつつ、そのバリエーションの在りようを素描しておきたいと考えるのみである。今少しテスト氏に拘泥しておこう。といっても、テスト氏そのもの、ないしはヴァレリーに対する興味は尽きないにしても、視点を少しずらして考えてみる。安吾は数ある坂口安吾論でも殆ど問題にされていない「新しき性格感情」という小文で次のごとき興味深い考えを記している。「私は、私自身を実験台上へのせて、一人のテスト氏を私の中から出発せしめ、このことを考えてみようという気持ちになっている。所詮文学に解決はない。ただ作家は誰しも自分のテスト氏を育てつづけていなければなるまいと思う。」彼のいう「このこと」とは、動物感情の消滅とその消滅が人生を豊富にしうるか否かという問い掛けである。昭和八年に書かれたこの文章は初期安吾の文学的探究のありかを明示している。ドストエフスキイやバルザックやスタンダールについて、

主にその虚構のありようや作中人物をいろいろな観点から考察している方法とほぼ同質のものだといえよう。そして、テスト氏はあくまでも安吾流に解釈されたテスト氏であって、次に素描するような性質をもっていない。そこが安吾らしいといえばいえる独特な観点にほかならないのである。

ここで問題になっているのは《私》そのものの在り方にほかならない。安吾のいう自分のテスト氏を育てつづけるという願望は、テスト氏の何者かを見極めつつ、徹底的に自己を凝視することを意味した。肉体の操り人形を抹殺した架空のテスト氏は、自己意識の絶対的統御に賭けた人物であった。自己の思索を自由に操り、論理の厳密性に執着した奇矯な男であった。テスト夫人が「神のない神秘家」と規定するのも適切だと思わせる人物にほかならぬ。また、ヴァレリーはいくつかの断章にこうも述べている。テスト氏はその考えの当然の帰結として、無限なんて大したものじゃないし、宇宙は紙の上にしか存在しない、と時間・空間論として特異なことを言う。あるいは、偶然から生れ、個人のイメージとして確かな相貌をもっていないテスト氏は、意識的である生き方や在り方を選択することが《簡素》という強い印象をもたらすのだ、とも。つまり、テスト氏はそこから出発しようとしても、一歩も踏み出すことのできない位置にとどまり、凝然として立ちつくすような在り方でしか存在できない何者かである。坂口安吾の踏み出しは、従って、架空の、捉え所のないものとの闘いということになる。先に述べた言い方をすれば、未知の自己を探求する旅に出ることであろう。

さてそうであるとして、安吾はごく初期に属する評論「ピエロ伝道者」「FARCEに就て」などによって、《道化》《ファルス》といった観念を提出し始めていた。そして、『木枯の酒倉から』『ふるさとに寄する讃歌』『風博士』など特異な小説が同時に書き始められた。このことは坂口安吾が観念的で理論的でもあるということを意味しない。見方によっては、多くの文学者志望の青年がそうであるように、安吾も外国文学、特にフランス文学の読書によって文学の道を切り開いていこうと考えていたと見做してよい。少年期から小説家になりたいと思っていたというのは、後年の意味づけ、または淡い夢の安吾流処理法の要素がつよい。いささか煩雑ないいかたをすれば、多くの文章で飾り立てられている少年の頃の放浪癖、またさまざまな伝説を生み出している旧制中学での落第、父親との関係、さらには当時の坂口家の家族や経済問題などが取り沙汰される学問嫌いによる大学進学の断念、翻意していわゆる道をもとめる意図を秘めた仏教大学への進学、求道的精神の探究といった青年前期の錯綜した選択を斟酌する必要があろう。

坂口安吾の少・青年期の足取りもよくあるように、判り辛いことが多い。ちゃんとした筋道を一本通しにくい。もとより、こういう傾向の芸術家の多くはそうだが、坂口安吾も最初から乱反射している。特に奇を衒うというわけではない。生地のまま歪な多面体ということができよう。だが、当然のこととして作品は自覚的に手法やモティーフが変えて書き分けられてい

た。「FARCEに就て」と『木枯の酒倉から』や『風博士』を関係づけて論を立てることができるにしても、そう生産的でないように、安吾の作品と批評はそれぞれ特異な切り口をもっている。歪であれなんであれ、予見を排してそれ自体を尊重しなければならない。たとえば、その頃、彼が本当に書こうとしていたことの一つは、血腥い善と悪の問題だと自分にいいきかせていた。ところで、彼の書き進めた作品は必ずしもそういうものではない。一例を挙げておけば「黒谷村」がある。この作品は或る一つの閉塞状態の中の人間心理の奥の襞について掘下げた初期の一つの達成だといえるが、彼は「人性の唄であり童話」だという。彼が帰心とかノスタルジイと呼ぶ心性、あるいは夢心地において書かれた《童話》という自己解説は、一つの解釈として興味深い。が、あくまでも坂口安吾流の言い分にほかならないのである。つまり、彼は自己の関心を精密に把握できなかった。いや、その多様性についてそれ程自覚的でなかった、あるいは混沌たる考えの渦の中の一つの真実の提示しかできなかったということができる。

断るまでもなく、坂口安吾が笑い、ナンセンス等の中に無邪気さを見いだし、そこに芸術の高尚さを認めるのはそれとして了解できる。また、「荒唐無稽」としてのファルスが芸術の最高形式だというのも同様だ。バフチンなどならモノローグ・ダイアローグ、また道化・カーニバル、自己喪失からの自己回復としての空想家の概念等を持ち出すかも知れない。『吹雪物語』に《夢と知性》と記されてあることから、ここで《夢》の意味について云々することもできよう。ともあれ、坂口安吾がカーニバル的な乱痴気騒ぎや、空想であれ、死であれ、否定であれ肯定し、途方もない混沌、矛盾などをぐいと呑み干すファルスについてそれなりに検討しつづけて、文学としての「道化」を構想するにいたるのは、周囲の無理解を顧慮しない若い小説家として頼もしい限りではある。敢えてつけくわえれば、時代の先取りにほかならなかったからこそ、ますます自己の問題がクローズアップされ、自らの文学的主題として鋭く俎上にのせられることになったに違いない。

小林秀雄、横光利一、牧野信一にしても、またここでいくらか論じようとしている坂口安吾や埴谷雄高なども或るとき怪物の自己に直面して、その解明のために頬の肉を削りつづけた。テスト氏やストア派やニヒリズムなどがマルクス主義の壊滅に近い状態、戦争態勢の進展、転向の拡大のなかで前面に出てきたと言いうる。シェストフの流行など彼らにあってそれ程問題ではない。おそらく彼らはドストエフスキイを底のほうから掬い上げていたはずだ。時代の波頭に浮かぶものではなく、自分の矛盾する感覚や生命感の渦巻きの底のほうにとぐろを巻いていたものが《自同律》だといってもよいからである。いうまでもなく、埴谷雄高が考究しつづけていた問題にほかならない。ソクラテス以前の哲学者達が自然と自己についてよく考えたことは周知のことである。たとえば、魂の不死、自然について最初に論じた人だと言われているゼノンは、何が困難なことかと訊かれて「自己自身を知ることだ」と答えたという。自己への

徹底した問い掛けはギリシア以来古く、かつ普遍的なものだということができる。感受性の鋭敏な若い創造者がその領域をすこしでも深めるべく努力するのは当然至極のことである。

では、埴谷雄高はどのように考え進めたのか。既にその獄中での、自我・宇宙論・最高存在のカントからの啓示については周知のことなので省略する。また、その間の感覚的・思想的な揺れ動きやいくらかの発明の経緯についても措く。もとより、ここはその足取りを詩的な世界に転移した『不合理ゆえに吾信ず』を論ずる場所でもない。気にかかる人は『洞窟』や『不合理ゆえに吾信ず』などを熟読玩味して貰いたい。捉えておくべきことは、《薔薇・屈辱・自同律》の中にしか自分の在り方を見いだし得ない人間が、心にもない虚偽を表白しつづけるペルソナートゥス（仮面者）へと到り着く精神の闘いの軌跡の厳しさと困難といったものである。仮面の観念は、埴谷雄高が錐をもみこむように解析したドストエフスキイの小説には重要な印として刻みこまれていた。埴谷雄高はその内実を直覚したであろう。ドストエフスキイがスタヴローギンについて書き記したようなかたちでの彼の長短をよく把捉していたように。したがって、皮肉な言い方をすれば、観念の継承者として、自己を徹底的に戯画化すべきであるにもかかわらず、そのようにできない後世の芸術家の悲喜劇が隠されてはいる。とはいえ、それは生と存在に対する絶望のアラベスクを織らざるをえなくなる者の、自己対象化の失敗ではない。そこに潜んでいるのは次のような、精神・肉体をひとたび悠久の自然と時間に晒してしまうつよい覚悟だといえる。つまり、自分の仮面が自然に対する平手打ちであり、そういう仮面が自分の風貌へと変貌する痛々しい成り行きを惨酷なまでに凝視する精神の在り方を深く自覚する受難の受容にほかならないのである。

昭和十年代は、戦争の時代という固定化した枠組みで捉えられ、すべてがべったりと黒く塗りつぶされた暗い印象がある。この通俗的な見解が一般的であるにしても、一方では陰影の深い精神の精華が花開いていて、優れた足跡が印されている。坂口安吾、埴谷雄高、石川淳、小林秀雄などを念頭におけばいわんとすることの幾分かはお解り戴けると思う。愚昧な時代思潮に対する尖鋭な批判が自己自身のうちに内向して、精神を鎖で呪縛することはもとより屢々おこりうる。そういう厳しい負を内在させつつ、その闇の独特な解明に赴いた人々が先に名前をあげた人を初めとして少くとも幾らか散見できるのは幸いである。それはいわば貴重な精神史上の遺産といいうる。

漠然と語ってきた《私》についての問題は、重要な解明課題であるにも係わらず、随分と蔑ろにされている。こういう時代には仕方が無いと見すごすことは、ますます愚劣な時代の悪運を甘受することでしかない。テスト氏や無名者やペルソナートゥスの新たなかたちでの発明が必要である所以である。それが二十一世紀も生きねばならぬ文学の一つの要請だとすれば、あいかわらず全否定者のほそぼそとした苦行に似た営為がつづけられねばなるまい。これは精神のやむを得ざる宿業にほかならないといえるのである。

（たていし　はく・文学部教授）